

灼熱の液体を注いで抜け出ていく。

ドロついたその液の中には、やはり小さな卵大の塊がいくつもあって——……

「ひいいい…っ♡いや…っ♡♡いやああ……ツツ！、♡」

それらの塊が腹の中でモゾモゾと形を変えはじめる感触に、恐怖のためか快感のためかわからない叫びをあげる。

「ほらほら、次々生まないと、大変なことになるぞ」

「う♡、う♡、あああああ……ツツ！♡♡♡」

男に指摘されるまでもなく、少年は水中の下腹を<sup>りき</sup>力ませていた。

ズリュンズリュンズリュン——ッ！♡♡♡

たてつづけに三匹ほど放出して、擦られた内壁と肉環から、解放感混じりの危険な<sup>はし</sup>悦楽が疾る。おもわず反らした胸にはまだ二匹の赤ちゃんが吸いついていて、左右バラバラのタイミングでぢゅう♡と吸われて気が遠くなる。

「う♡♡、あ♡、ひ♡、ああ……ッ♡ううう……ツツ！♡♡」

胸と後孔との快感と、焦りと——いろんなものに追い立てられながら、触手に囚